

あとがき



全建総連の「60年史」の一環として、先輩たちのインタビューを始めたのが2015年10月。そして、「60年史」の執筆依頼を受けたのが2018年5月6日でした。

「30年史」よりレベルアップしたものを、という要望でした。「30年史」は、機関紙「全建総連」の編集者を30年以上も務めた千葉景四郎さんが中心になって、心血を注いで製作したものでした。千葉さんは、私の師匠とも言える存在です。師匠の作品より「レベルアップ」という言葉に、少し躊躇しました。ですが、定

年を待たずに退任せざるを得なかった申し訳なさも手伝って、お引き受けしました。その後、コロナ感染が地球全体に拡がったことによって、60年史は「65年史」へと変更を余儀なくされました。

「この5項目について書いて下さい」という依頼があり、2026年の始めまで資料を読んでは原稿を書くという作業が始まりました。

編纂の方針として、①その年の特徴を簡単に示す、②全建総連大会と各県連・組合の特徴的な動きを入れる、③5項目には入らないが、その年の運動で外せないもの、④地震災害など社会的に大きな事柄、⑤政府への予算要求の運動を入れることにしました。

大量の資料に目を通して感じることは、全建総連には日本全国、津々浦々に仲間がいて、それぞれの地域で様々な運動や取り組みが行われている、ということudur。本当に頭の下がる思いでした。そういう仲間たちの活動ぶりに触れてもらえるとありがたいのですが。

65年の歴史を簡単に振り返ると、次のようになるのでしょようか。

①1960年の結成から10年程は、日雇健康保険の擬制適用の制度を守る運動。
②1970年の建設国保組合設立から現在までは、国保組合に対する国庫補助金確保の運動。1977年に

は職人憲法を発表し、1978年からは住宅デー運動が始まりました。

③2011年の東日本大震災以降は、応急仮設木造住宅建設や公共工事設計労務単価の引き上げなど、地域社会に貢献する運動が、社会的に認められるようになってきました。

一方で、かつては考えられなかった建設業への若手入職者の減少への対応が求められる時代になってきました。

65年間の歴史ですから、仕方のないことではありますが、大変分量が多くなっています。

ページをめくっていただいて、先人の取り組みに触れ、全国の仲間たちの独創的な取り組みに勇気づけられたら、こんなに嬉しいことはありません。

（全建総連 元書記長 古市良洋）